

大塚敬節
責任編集
矢數道明

近世漢方醫學書集成

48

多紀元堅一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 48

多紀元堅 (-)

第II期
全30卷

昭和五十六年五月二十五日 発行

編者 大塚 敬節

発行者 中村 安孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八二五)二七〇番代
振替口座 東京七一二七五九番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えます。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



多紀元堅肖像

凡 例

- 一、本書第四十八卷「多紀元堅(一)」には、『雑病広要』巻第一―巻第六までを収録した。
- 二、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 雑病広要 木活本 四十巻のうち三十巻三十冊
- 一、解説は、矢数道明(北里研究所付属東洋医学総合研究所長)が執筆した。
- 一、巻頭の多紀元堅肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

江戸医学館の巨峰

蒔庭多紀元堅

矢数道明

一、はじめに

江戸時代の後期、幕府医学館督事として運営の衝に当たった多紀家系図（三二頁参照）を一覧すると、その業績の秀でた巨峰として元堅の名は最も光輝を放っている。

元堅に関する記録としては、森潤三郎氏『多紀氏の事蹟』、小山寛二氏「多紀元堅と江戸医学館の光芒」（『漢方医学の源流』）、岡西為人氏「考証学派の医書校刊」（『漢方の臨牀』9巻11・12特集号）等に詳しく、その他の医史学書は、いずれも父元簡と共に元堅の多彩な業績について述べている。

いまこれら先人の記録を総合し、筆者従来の調査事項を追記して、元堅の活躍とその人間像をまとめてみることにした。

二、多紀元堅の略歴、及び著書校刊

多紀元堅。字は亦柔、蒨庭と号し、幼名は綱之進、長じて安叔と称した。寛政七年（一七九五）元簡の五男として江戸に生まれた。元簡の跡は三男元胤が嗣ぎ、元堅は分家したため天保二年（一八三一）三十七歳にして、はじめて医学館の講書を命ぜられ、天保六年（一八三五）奥詰医師となり、毎月一回將軍家齊の拝診を命ぜられた。天保七年十一月奥医師となり、家齊の隠退に従つて西丸附となり、十二月法眼、十一年十二月法印に昇り、樂真院と称した。天保十四年（一八四三）七月医書百部を医学館に献納、弘化二年（一八四五）五十一歳のとき將軍家慶のお匙となる。十月屋敷を賜り、浜町元矢の倉に転じ、嘉永六年（一八五三）八月印号を樂春院と改め、安政四年（一八五七）二月十四日に没した。享年六十三。

元堅の著書と校刊事業は、特に医学館の名声を高め、日本医学史上不朽の業績として現在に生きている。（元堅の号蒨庭の蒨は、諸書に仮り字多く、蒨が正しく、ヨロイグサ、香りの高い草である。）元堅の著書としては次の如きものがある。

- (1) 傷寒広要 十二卷 文政十年（一八二七）
- (2) 名医彙論 八十卷 天保元年（一八三〇）
- (3) 薬治通義 十二卷 天保十年（一八三九）
- (4) 診病奇怪 天保十四年（一八四三）
- (5) 傷寒論述義 五卷補一卷 弘化元年（一八四四）
- (6) 素問紹識 六卷 弘化三年（一八四六）
- (7) 備急千金要方の校刊 三十卷 嘉永二年（一八四九）
- (8) 金匱要略述義 三卷 安政元年（一八五四）
- (9) 医心方の校刊 三十卷 安政元年（一八五四）
- (10) 女科広要 五卷（写本） 安政三年（一八五六）
- (11) 雑病広要 四十卷 慶応二年（一八六六）
- (12) 時還読我書 二卷二冊 明治六年（一八七三）
- (13) 時還読我書続録 一卷一冊
- (14) 傷寒綜概
- (15) 診腹要訣
- (16) 櫟窓先生遺説

(17) 證治通義 二十卷

三、本集成に集録された元堅の著書

雜病広要 四十卷四十冊 慶応二年刊（安政三年序）

本書の冒頭に引用書目があるが、傷寒論、金匱要略を除き、中藏經以下姑妄聴之に至る。実に各時代の代表的書三百十六部の群書より採録し、まさに考証該博驚くべき労作である。中風より始まり癘に至る病類を分かつこと七十四部門、諸種疾患について、傷寒を除く雜病の、病因、症候、治法、治方を諸書より拔萃して、その治方を詳論縷述したもので、自家の臨床経験を主としていない憾みはあるが、唐以後の古医書を繙くことなく、各時代の雜病に対する治療法を知ることができる。

本書は全四十巻の大著であるが、三十巻までしか刊行されなかったらしく、三十一巻以降は稿・写本でしか見ることができない。

時還読我書 二卷 明治六年刊

史伝、考証、治方等各方面の見聞録、折りにふれて書き留めたメモ、随筆で、実に広範な興味ある資料が溢れている。

法眼安叔の頃からの累積で、別に一書とする目的でなく楽しみながら書き留めたものであったが、貴重な資料が多いために文久三年（一八六三）門人佐藤元長がこれをまとめ、長男元琰が校勘して明治六年出版した。上下二巻に分かれて、上巻に五十二項目、下巻に百十七項目、合計百六十九項目に亘る克明でしかも興味深い随想集である。元堅の真摯な性格、虚心坦懐の文章は、まことに爽やかな余韻を残している。大正十三年刊行された『杏林叢書』の第二輯に続録と共に復刻載録されている。

時還読我書続録

続録は、写本として伝えられ、刊本はみられないようである。これも法眼安叔とあって、若い頃から書きとどめたもので、刊行された『時還読我書』に漏れたものである。筆者所蔵の写本を底本としたが、続録には全部で七十二項目に亘って、史伝、考証、治方、民間伝承などが記録されている。

この続録の中に、躰壽館創立のことが詳しく述べてあり、医学館の構成、百日教育法のことなどが詳述されている。また刀圭の語の起源、元簡が入手した齊刀銭の図が掲げられてある。更に蘭医シーボルトのことを紹介した一文が興味深い。

シーボルトが長崎に住んでいた頃、筑前の樂善老侯が長崎を巡視し、シーボルトに会い、「医術の極意は如何」と質問したところ、シーボルトは答えて「アジアの病はアジアの治術に非ざれば

病を癒すこと能わず、ヨーロッパの病はヨーロッパの方薬に非ざれば効を得ること能わず、印度地方は仏經に載するところの論説に基づきたるものこそ宜し、医術は自ら其の風土に随うもので、彼此相通すべきものに非ず、是れその極意なり」といえりと老侯が語ったという。

元堅はこれに対して、「シーボルトは医の理に精しく、固執の念なきは誠に貴ぶべきことこそ」と虚心これを賛えているのが、元堅の優しい一面である。

四、元堅の人となり逸話集

別号と院号

元堅に三松の別号がある。矢の倉の邸は、東は若松町、西は久松町、北は村松町に接していたから、自ら三松の号をつけた。院号を楽真院より樂春院と改めたのは、侍医として仕えた將軍家慶が薨じて、慎徳院殿と諡おくりなしたので、慎の字音を避けて春と改めたという。

幼時の発憤

洪江保筆記によれば、元堅は幼時犬を闘わしむることを好んで、学業を怠り、あるとき人から、父や兄を見なさいと責められた。そのとき、幼い元堅は「今にみよ兄より立派な医者になって見せるから」と決心し、それから生れ変わったように書を読み、精力衆に優れ、識見人を驚かすよう

になったという。

医は仁術

元堅は常に「医は仁術なり」の語を体し、いかなる貧家から招かれても喜んでそのもとめに応じ、単に薬を無償で給するばかりでなく、夏は蚊帳を、冬は布団を、その上三両から五両の金銭を貧窮の度に従って与えたという。

元堅は『時還読我書』に曲直瀬玄朔のことを賞賛している。元堅は曲直瀬玄朔掟十六条の第十条に「貴賤に限らず精を入れるべし。いかに卑賤の者なりとも、病者をば我身の主君と心得べし、云々」とあるのを読んで、いたく心を打たれたらしい。そして『時還読我書』下巻の二丁目に、「延寿院玄朔の遺戒は至って深切なるものなり、げにも篤志の人と思わる。貧賤の疾をも意を用いて治すべし、主君へ奉公と思うべし、といえるは最も感服に堪えたり」と記しているが、元堅は玄朔に劣らぬ仁術を施したものと思われる。

元堅、八代目団十郎を診す

かつて將軍家慶を拝診した際、家慶は「樂真院本日は退城後何くに往診するや」とご下問があった。元堅が、「本日はこれから俳優八代目団十郎を診察する予定」と答えると將軍は、「河原乞食（当時俳優は蔑視されていた）を診察するのか」と重ねて問われたとき、「医は司命の職にして仁術なり、何ぞ尊卑を論ぜん」と答えたので、將軍は大いに感賞し、さすがは樂真院と歎称したと

いう。

水戸斉昭との関係

天保七年（一八三六）五月二十三日、元堅は幕府の命により水戸斉修夫人峰寿院（將軍家齊の女）を診治して効があつた。將軍家慶はこれを嘉賞し、その年法眼に叙し侍医に進められた。老侯水戸斉昭も深く嘉賞され、親ら篆文数百言の「医弊説」を書し、元堅の衣章紋は梅鉢に蕊を二十本おいてあつたので、斉昭はその紋の梅花に擬して梅の花を写し、自ら賛を書いてこれを賜つた。その賛は「百千鳥さえづる春の初めより先づ咲き出で、匂う此の花」というものであつた。

それより後斉昭の信任を得て、密かに国事に関する使命を受け、島津斉彬に伺候し、斉彬の大患を治して奇効を奏し、島津家伝来の名画韓晁假面図趙仲穆の雙幅、及び公親ら筆した鶉うすの画を賜つたということである。

庶子としての立場

元堅の生まれたのは寛政七年（一七九五）であるが、その月日は不明のようである。

文化十一年（一八一四）四月、元堅は療治修業のために町住居をなすとあつて、はじめ浅草三好町に住し、町医者となつて親しく庶民の診療に当たつた。

小山寛二氏の「多紀元堅と江戸医学館の光芒」の中に、元堅の分家の事項のところで、現在の多紀家の後裔の話として、元堅は元簡の庶子であつたことが語られている。元堅の天性の聡明は

衆目の認めるところで、本家との交わりも繁く、兄の元胤は「弟亦柔^{やうじやう}は余と硯席^{けんせき}を同じくし、交わりは師友たり」といって、元堅の学問と人となりを激賞している。当時庶子にして父業を嗣いだものは、吉益東洞の庶子羸齋、杉田立郷（玄白の庶子）等数多くあった。

元堅の後嗣多紀英樹氏の通信によると、城官寺の多紀家の墓は本家と分家と同一地域で境界がなかったが、英樹氏の祖母の父に当たる藤丸正蔵氏の墓碑を建てた明治年間に、はじめて境界を作ったことである。

ある大名との対決

ある日元堅は將軍診察のため登城の途中、さる大名の行樂の行列に出遇った。その従者五、六十人、元堅の相伴は十人ばかりであった。當時は將軍公用の者は、他の行列を横断して差支えない規定であった。よつて元堅の従者が、大名の行列を横断せんとして口論乱闘となり、籠かきもこれに加わった。元堅は騒ぎをさけて、丁度患家越後屋にて休息していると、元堅の薬籠を大名の従者が奪い去った。元堅は急ぎ代りの薬籠をとりよせ、籠かきの代りを雇つて登城し、拝診を済ませた。

元堅は家に帰つて、塾頭と若党を、大名の家老の許に遣わし、今朝登城の際、小官の従者と君侯の従者争鬭を爲した。小官の従者は小官においてその罪を糾すことにするが、君侯の従者が小官の薬籠を掠奪した。薬籠に何の罪があるか、楽春院は小官たりとも薬籠の予備がある故、掠奪

され汚れたものは返還は固く辞退する、と条理を尽した申出にその大名は平身低頭、心より罪を詫びたという。

多紀崇徳氏

多紀分家元堅の孫に当たる多紀崇徳氏は、多くの資料を保管していたが、震災、戦災等によってその殆どを失ったということである。『多紀氏の事蹟』は崇徳氏の協力による処が多かったと著者も述べている。元簡の解説のときにも触れてあるが（本集成第四十一巻）、昭和三十年頃、崇徳氏は板橋区向原町に住んで居られ、通産省に勤務していた。私は崇徳氏の隣り石井家へ度々往診し、患家から崇徳氏のことをきき、以後親交を得て、夫人の診治にも当たり、多紀家のことについて種々教えを受けたことがある。

藤浪剛一博士の『医家先哲肖像集』に掲げてある、元堅の肖像は柳沢と入れ違っていることを夫人より教えられた。

また昭和三十一年、日本医事新報に「多紀家累代の墓塋」を投稿したとき、多紀本家の後裔、多紀重安氏を港区青山南町に訪ねたことがあり、鶴郎氏の実兄森田恒一氏とも親交を結んだことがある。

元堅の蘭学への圧力

蘭学が勃興し、それに対して医学館督事多紀元堅は、その権勢を以て幕府に強要し、阿部伊勢

守の名を以て外科眼科以外は蘭方医学の禁止令を布告せしめた。嘉永二年（一八四九）三月十五日のことである。次いで九月二十六日、蘭書翻訳取締令を出し、医書の出版は凡て医学館の許可を得ることとした。

当時、元堅を頂点とした漢方医の蘭方医圧迫のエピソードが、『近世医傑伝』の中にある。松本良順の結婚に対する圧力干渉である。幕府医官であり漢方医であった松本良戴の一人娘とき子の躰養子として、千葉佐倉にあって蘭方医学塾順天堂を主宰していた佐藤泰然の次男良順を迎えることが決定した。時恰も蘭医禁令布告の直前であったので、元堅としては建前としてこれを認めることはできない。元堅はこれに横槍を入れて反対した。松本、佐藤両家はすでに縁談が決まったのに、家庭的縁組にまで干渉をうけて困ったが、医学館を主宰する権力にはなす術がなかった。誰れが考えたか、両方の顔を立てる一策を提案したものがあつた。それは二ヵ月後に良順に対して医学館において漢方の試験をして、若し合格したならば、漢方医として躰入を認めるという一案である。良順はいささかも漢方の素養がないので困ったが、岳父となる松本良戴が、それから二ヵ月間に漢方医学の特訓をしいよいよ受験することになった。

嘉永二年のはじめのことで、医学館で行われた試験委員は樂真院多紀元堅と野間寿昌院であったが、良順は堂々とこれに応じて見事合格、めでたく松本家の人となった。時移り明治三十八年、良順は蘭方医学の最高峰軍医総監男爵蘭疇松本順となった。